

ミツバチに代わる即戦力 クロマルハナバチ試験導入

3月2日、久喜市菖蒲町、市原功樹さんのイチゴ連棟ハウス（約10.7a）で国産クロマルハナバチの試験導入を行いました。

市原さんは昨年11月からミツバチを3群導入していましたが、2月後半から飛びが悪くなり追加導入を考えていたところ、TACからクロマルハナバチのことを聞き試験的に導入することを決意しました。

ミツバチよりもおとなしい特性を持つクロマルハナバチは、1匹あたりの訪花数は多く30分間に約300花を訪れ、厳寒期や天候不順時にも活躍します。約10.7aの圃場では1群と少数で十分受粉ができます。

市原さんは「2～3ヶ月ほどしか活躍できないクロマルハナバチですが、出荷は5月中旬までなので厳寒期導入で十分使えると思います。短い期間ですが活躍を期待しています」と話していました。市原さんのハウスにはネットが張られており、蜂が施設外の花を求めて飛散しないよう環境づくりもしています。



クロマルハナバチ設置指導する
TACと市原さん

梨畑の労働力不足を助ける 梨栽培サポーター制度



1月下旬から3月上旬にかけて、「JA南彩無料職業紹介所」「JA南彩あぐりサポート・梨栽培サポーター」では仕事の求人者と求職者の職業紹介を行い、依頼があった梨畑の剪定作業が行われました。

この取組みは地域特産品である梨の栽培を維持するため、労働力不足により栽培、収穫、管理が困難になった梨農家から連絡があった時、「JA南彩新規梨塾生や地域の梨農家を中心とした「JA南彩あぐりサポート・梨栽培サポーター」登録者へJA南彩が職業紹介をしています。

依頼をした梨農家は「今までは両親が中心となり作業をしていましたが、高齢で作業が困難となり自分だけでは剪定作業に手がまわらず、梨栽培をやめようかと思っていましたが、この制度を知り登録をしました。梨栽培サポーターの皆さんに仕事をしてもらい、梨畑の維持ができてとても助かりました」と話

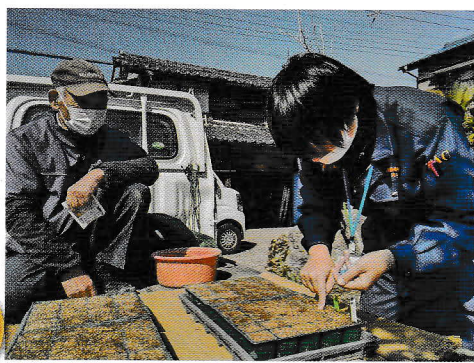
し、梨栽培サポーターの鈴木精一さんは「一度やめてしまうとその梨畑はもう元に戻せない。日本の梨は、おいしく世界に誇れる特産品なので、この制度を多くの人に知ってもらいたいです。自分も地域の特産品を守る一員として役に立てれば嬉しいです」と話していました。

JA南彩イチオシ！ほっとけ栗たんかぼちゃ 播種定植はじまる

3月10日、久喜地区南瓜部会の副会長中山正雄さん宅で、春日部農林振興センター職員、TACが参加し、ほっとけ栗たんかぼちゃの播種を行い、今後の栽培についても検討しました。

ほっとけ栗たんかぼちゃは1本の苗木に1～2個の実をつけることが理想的だといわれています。昨年は平均で約1～2個の着果でした。

中山副会長は、「1本の苗木に2個のかぼちゃを作るという目標で栽培に取り組んでいます。今年は早出しとして3月中旬に定植し、6月下旬頃出荷を目指しています。ホクホク感と甘みのある美味しい栗たんかぼちゃ栽培に部会の皆さんと協力し、良い品質と栽培技術向上に努めてまいります。みなさんに美味しいかぼちゃを食べていただきたいです」と話していました。



女性部

3月11日、JA南彩女性部蓮田支部は、蓮田支店において、種まきから田植えまでをメインに第2回目の水稻講習会を開催し15名が参加しました。

参加者からは積極的な質問があり、講師の説明に力がこもるほどの好評な講習会になりました。

